

## 『長好師家集』 および紙背文書について

大谷 俊太（奈良女子大学教授）

本館所蔵の貴重書『長好師家集』を紹介する。本書は江戸時代初期の歌人、望月長孝自筆の私家集である。望月長孝は元和五年（一六一九）生まれ、延宝九年（一六八一）没、享年六十三歳。四郎右衛門、重公、兼友、長好と名乗る。長孝は最晩年の名称。明暦四年、四十歳の時、剃髪。法号、道空。洛西嵯峨野広沢池畔に庵、小狭野屋を結ぶ。十三歳の時から和歌を松永貞徳に学び、飛鳥井雅章・雅直父子らとも交わる。貞徳門の和田以悦とともに貞徳歌学を継承し、のちの平間長雅・有賀長伯と続く地下歌学の有力な一派の系譜に名を連ねる。また、松江重頼らと交わり俳諧にも遊び、鹿苑寺鳳林承章のもとに出入りもした。

『長好師家集』は写本で十八巻十冊。大本（縦28.5㎝・横22.2㎝、ただし、冊により数ミリの違いはある）、四つ目袋綴。香色紙表紙。後背装。全十冊のうち、丁数の多い五冊は、紙の右端で仮綴し、その右に四角柱の板を宛てて背面部分とするという特殊な製本を行っている。おそらくは本の喉の部分が綴じることにより見えなくなすることを懼れて、右端に四角柱を副え後背装にして体裁を整えたものと思われる。外題は左肩に楮紙の題箋に墨書で「長好師家集 一一」（第一冊、但し剥落部分多し）。表紙・外題箋とも後装。料紙は楮紙だが、たまに斐楮交漉き料紙や小豆色楮紙料紙も用いられている。各冊の第一丁もしくは第二丁表右上や見返し左上に「住友氏蔵」の朱の方印を捺す。即ち本書は明治四十年（一九〇七）に本館に寄贈された住友家旧蔵書中の一冊で、「住友氏蔵」の蔵書印からも住友本店に伝わったものと知れる。（中之島図書館百周年記念展示図録「住友春翠からの贈り物」二〇〇四年六月～七月）それもそのはず、住友家の三代、住友新右衛門友信は長孝の歌道の門弟であった。本書にも、たとえば、

（延宝七年）正月廿六日、友信丈新宅興行会

兼 梅始開

鶯も百よるこびのこゑそへて宿しめそむる梅の初花

当 岑樹霞

朝日影いざよふ岑に薄くこく霞も果ぬ松のむらだち

同廿八日、友信興行、兼題同前

春山 当座

山桜今かよしの、春ならしきけるさかざるかつちるもみゆ

などと友信主催の歌会での歌が収載される。本館には本書の他にも、『古今和歌集両度聞書』など長孝の旧蔵書・伝授書など長孝縁りの資料が襲蔵されている。（日下幸男『近世古今伝授史の研究 地下編』）

本書の外題「長好師家集」は、「師」とあるので、もとより後に付された書名であるが、内題には「塵壺 前後不同」（第一冊から第七冊）、「塵泥」（第八冊から第十三冊・第十五冊から第十七冊）、「麓塵」（第十四冊）、「稽古」（第十八冊）とあり、自らの和歌を「塵」と謙遜するのであるから、これは長孝自身の命名である。つまり、本書は長孝自筆の自撰家集であり、上述のような特殊な製本が施されたのも、本書の内容・外形を尊重し損なうことなくそのままに伝えようとした後人の所為であることを思うとき、本書の確かな伝来と貴重さが知られるのである。それ故に、夙に本紀要の一三〇一五号（一九七七年）一九七九年）に、多治比郁夫氏ほかの方々によって、巻五までの前半の翻刻紹介がなされたのであった。

最後の十八巻は「定家卿出題百首和歌」の草稿の書付であり、これを別にする、本書の編纂方針は大きく二つに分かれる。第一・二冊は、承応二年までの詠歌を部類して排列する。第三冊目は、承応二年までの定数歌などが置かれた後、承応三年から明暦三年の詠歌が部類分けして並べられ第五冊目まで続く。第六冊目以降は、詠まれた時間に沿って並べられている。承応二年の時点で一度、また明暦四年の時点でもう一度、それまでの詠草を整理し、おそらくは自らの家集をまとめるための下準備とし、明暦四年以後は日付順に書き継いで行って現在の形をとったものと推測されるのである。因みに、承応二年十一月十五日には師の松永貞徳が没しており、明暦四年は長孝四十歳、嵯峨野広沢池畔に隠居した年である。

さて、本書の和歌の詞書きには、歌題のみならず、歌会が行われた場所や興行者などが明記される場合があり、年次別排列でもあるところから、長孝の詠作活動の実際、また、和歌をめぐっての長孝の交遊のさまが具体的にうかがえ興味深い。しかし、その長孝の交遊、あるいはまた、長孝の日常を窺うことのできる資料として、さらに注目すべき資料群が、実は本書の中にある。本書全十八巻、総計五百四丁の料紙は、そのほとんどが長孝のところに寄せられた手紙、詠草、薬の包紙などが再利用されたものなのである。

以前から、表側の家集を閲覧した幾たりもの研究者が紙背の文字を透かし読もうと試み断念を余儀なくされて来たのであったが、今回、表側の家集を全巻に渡り翻刻する作業に

多治比郁夫氏と従事する中で、中之島図書館のご厚意により、綴を外すことで各丁の紙背文書をつぶさに閲覧する機会を与えられたことは、まことに有難いことであった。

本書は大切に扱われてきた伝来品であり、やや特殊な装丁が施されているのであるから、一旦綴を外した後、再び現状のままに復元することとし、そのために万全を期すこととした。まず、現状の詳細な書誌的調査と写真撮影を行い、中身の家集についても表側のすべでの文字を解読、全体の翻字原稿を作成し錯簡・綴違えの有無を確認した。その上で表装・和本修復の専門家に本館への出張を依頼し、綴を外したのである。やや特殊な装丁ではあったが、糊付けなどはほとんど行われておらず、ほぼ通常の袋綴製本の場合と同じ作業で解体できたことは、和本の綴糸は消耗品であり、綴し直しや改装が行われることが和本の常態であることを改めて知ることとなった。

本書の紙背文書約五〇〇点の内訳は、薬などの包紙が約一一〇点、詠草や懐紙の草案などが約一〇〇点、長孝宛の書状ないしは長孝書状の下書きが約二五〇点である。

薬の包紙とは、「蘇生丹」「四君子湯」などと表書きのあるもので、「和中湯」とある包紙には「只今急用之間、先御薬加減いたし進申候。下血にも腹痛にも此薬能御座候」(巻六の三三三丁)とあるので、医者処方によるものと思われるが、誰であるかは不詳である。宛先はほとんどが「かめや四郎右衛門」とあるが、これは長孝のこと。長孝自身もしくは家族が服用したのであろう。また、薬以外に金額のみが記された包紙も十数枚見られるのは、あるいは歌の添削指導に対する礼金かとも思われるが不詳。

次に、詠草や懐紙の草案では、たとえば、巻十五の第十四丁の紙背は長孝の和歌詠草である。

去廿日兼題

兼友 上

寒草

／＼冬がれの入江のあしの霜ゆきにおられぬなみやほにのこるらん

同日当座

寄朝恋

／＼すきまもる袖の日影にまがへてもものおもふねやのあけのみみだは

／＼このねぬるあさて小衾ぬぐもおし幾日もあれな人のうつり香

第三句、小さく入てきこえ侍。されど又かやつになくてやは。ぬぎかへにしなどは一入ゆうに

きこえ侍。置所ゆへにや。兼当両首御認可被遣候。珍重。／＼

当十五兼

雪満群山

大ひえやふりさけみれば雲の上に白雪たかし比良も横川も  
降つもる山の端毎にながめても又ふたつなき雪の月かげ

下句、ふときこえて侍。相摺などの五毛にて待らばさきこそ。されど、雪の月影とつとまては  
落題たるべきにや

可然様御添削可忝候。

僻案之四墨、四。長、吉。

愚案未調候。何共有がたき題にて候。



卷十五 十四丁

歌の作者の兼友とは長孝のこと。署名の下に「上」たてまつる（「とあり、文末に「可然様御添削可忝候」とあるので、師匠に対して自らの詠歌を見せ添削・合点を依頼しているものである。二字下げで少し小さな文字の部分が師による評語。長孝の和歌の師としては

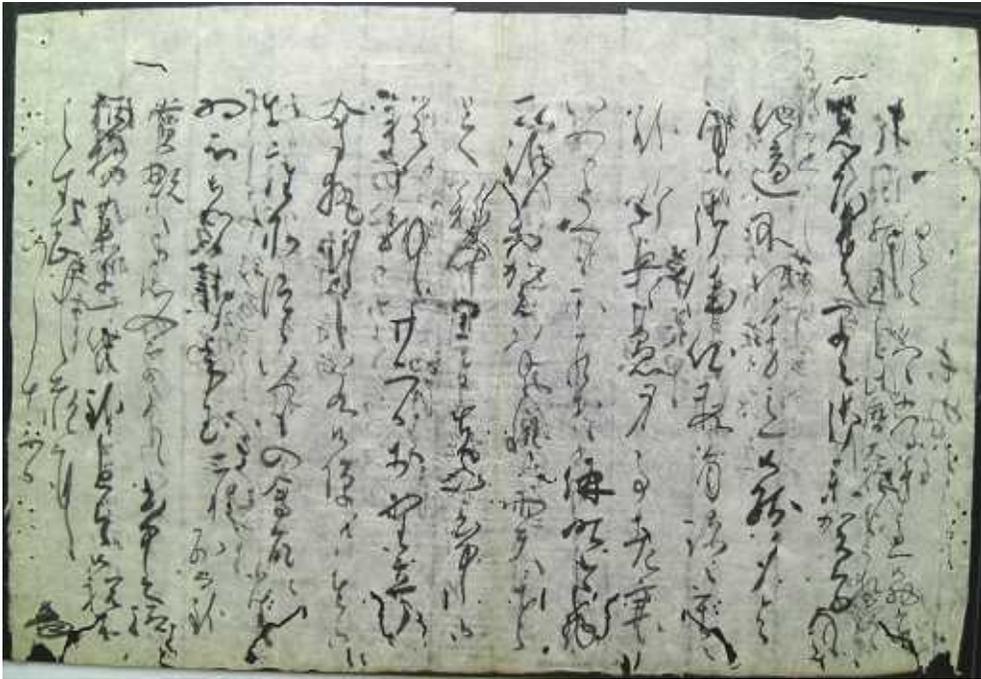
飛鳥井雅章と松永貞徳の名が挙がるが、和歌に直接添削が施されていない点、評語に「両首御認可被遣候」と敬語表現を用いていることを勘案すれば、添削者は貞徳の可能性がある。いずれにせよ長孝自筆の添削・合点資料として貴重である。

次に、紙背文書のうち最も分量の多い長孝宛書状から一例を示す。裏端書には「餘齋」「長好様 以悦」とあり、和田以悦の書状であると知られる。

猶々久々不得芳意御物遠に打過申候。此曆大より被頼便候間伝達申候。以上。先度者早々御参賀忝存候。他適不得芳意御残多令存候。御佳作数首玆々重々致吟興候。愚身事老衰、いつかたへも不罷出候。併昨今之内可致参賀存候処候。雨天老足難叶候間、先以書中御祝申納候。廿二日於野亭会執行申候。若御隙共候者、御出座忝存候。いつもの会衆に御座候。将亦先日御年玉二種、別而致賞翫御心入忝存候。書中之験柄杓菓子一袋致進上候。御祝義之寸志斗候。恐惶謹言

正月十三日

(花押)



卷八 二十五丁

和田以悦は長孝と同じく貞徳門下の歌人で、長孝より二十三歳の年長である。以悦は貞徳から古今伝受を受けたが、長孝もその席に同席した。右の書状は以悦の自筆資料として注目に値するが、以悦が餘齋の号を持っていたことも、これまで報告されていない。書状の内容は、新年の挨拶と歳旦詠拝見の御礼と以悦亭での和歌会への出席の誘いである。特段特別な内容の書状とは言えないが、このような一通一通の書状の集積によって長孝たちの日常の生活の一齣一齣がリアルに再現され、引いては京都の町衆である長孝の、ものの考え方、感じ方を知るよすがとなる。

以上僅か二例のみではあるが、本書の紙背文書の持つ意義の一端を紹介した。もとより、紙背文書中に見える人物名などの情報が、表側の和歌の解釈の精度を上げることにもなる。墨の裏写りが激しい本書の場合、表と裏とを合わせ見るにより読み取れる文字もまた少なくないのである。紙背文書の閲覧・解読に際して高配を賜った佐藤敏江大阪資料・古典籍課長はじめ中之島図書館各位に深謝致します。